

“MY TOWN” うおっちんで

# 歩キ目デス & 足ラテス

Vol.44

## 西予市の 歴史的界隈性について

タウンツーリズム講座主宰・  
ヘリテージマネージャー

岡崎 直司

来たる10月に実施される「第31回全国町並みゼミ「卯之町大会」(29頁参照)に向けて、西予市の歴史的な魅力に迫ってみたい。話題に上ることの多い中町の町並み以外にも、多層的な歴史空間が周囲には存在する。

### 城川・野村エリアの茶堂群

西予市の山間部、城川・野村周辺には、「茶堂」と呼ばれる建物がおよそ100棟余りも分布している。厳密には、高知県梶原町や大洲市肱川町、河辺町辺りにも分布していて、地域における信仰習俗としての建築形態なのだが、全国的に見ても個性的なふるさとの風景として認識を新たにしたい。実際、既に昭和53年

善福寺薬師堂 (西山田)



蔭之地茶堂 (城川)・  
茅葺きのお堂



わらぐろ風景 (石城地区)



ごまじり茶堂 (城川)・  
鉄骨造のお堂

には国選択の無形民俗文化財として「伊予の茶堂と習俗」が選定されていて、それ自体があまり知られていない。  
概ねの建築スタイルは、屋根は宝形茅葺き、四本柱で支えた三方吹き放しの堂宇で、正面の壁に大師像や地藏、観音像などをまつる。昨今では茅葺きによる修復も次第に困難となり、トタン葺き、あるいは瓦葺きによる茶堂が増えてきた。西予市でも現在までは年に二、三棟の修復予算を組んでいるが、今後は不明。分科会では、限界集落などで“お接待”行事の継続が各地区で難しくなっている現状と合わせ、討議される。

### 石城地区の“わらぐろ”風景

農業形態が米作地帯である場所では、かつて全国各地で見られたのが“積み藁”の風景。ただ、その呼び名と形は様々で、我々のエリアではそれを“わらぐろ”と呼ぶ。刈り取った藁を後日再利用するために、現場で乾燥貯蔵するコンバクトな形としてそうした農業風景が自然に成立した。それが、農業の近代化の課程で機械化・省力化が進み、藁の需要も激減していつの間にかそれは不必要なワザとなった。宇和盆地では、「宇和わらぐろの会」の活動や、れんげ祭り に合わせての製作などで、何とか風景が少し見られるが、絶滅危惧種の文化には

違いない。農の匠の技が、今消滅しようとしている。

### 山田薬師の門前集落「西山田」

日本三大薬師の一つ、西山田にある善福寺。その参道沿いにある門前集落は、お釈迦様の誕生日である四月八日の縁日「花まつり」に合わせて、今も障子の張り替えや庭の手入れなどを欠かさない家が何軒か存在する。かつては近郷近在から峠を越えて、善男善女の列が山田薬師へと続いた。筆者の子供時代を思い出しても、参道には名物「ひょうたん菓子」を売る出店が並び、現在のイメージではまるで松山の「椿さん」の様子に近かった。明治から昭和初期にかけて、米、山林、養蚕などの豊かな現金収入がもたらした時代に、しっかりと農家の住宅が建てられ、今も大事に守り維持されている。別に保存地区ではなく、生活の中で日常として使い続ける奇跡的な空間。その継承が今の時代の鍵。

### 宇和島藩最北の宿場「東多田」

宇和島街道が中町から北に転じ、5、6kmほど行くと、かつて宇和島藩で最北の宿場だった東多田の集落に至る。現在は宇和町になっている久保・信里あたりは、昭和30年に大洲市から宇和町に

へんろ道でもある東多田の町並みを  
高野山の若い僧が歩く



東多田の町並み、緩やかな坂がカーブする



障子の美しい  
土居マサエ家住宅 (西山田)

朝屋新地 (三瓶)



### 三瓶地区、朝屋新地の葺の町並み

西予市が取得し、民間委託となっている「みかめ本館」の屋上からの眺めは、誰も知らない異空間。丁度見下ろすと、かつての豪商朝屋が埋め立て、朝屋新地と呼ばれる街区いづかの葺の家並みが見られる。鯉幟の唄にも歌われる「葺の波」も、昨今ではなかなかお目にかからなくなってきた。ツーバイフォーや鉄骨や鉄筋コンクリート、町には様々な建築形態が自由気ままに存在している。かつて幕末に来日した外国人を驚かせた、あの美しかった日本の町並みはどこへ行ったのだらう。そんなことを気付かせる光景が、眼下にかろうじて残っている。

編入されたが、元は大洲藩だった。従って、東多田の町並みには宇和島藩の番所が設けられ、戦略的な位置でもあった。ここには、「多田郷土史研究会」という熱心な歴史研究の方々がおられ、地域の歴史発掘が様々にされている。山手には大梅寺を一番とする地四国の八十八箇所コースもあり、加えて緩やかな坂と直線でない街道の在り様が、連なる旧家の佇まいと相まって、豊かな歴史を醸している。